



西日本プラント工業株式会社勤務の緒統真人（おつづき まさと）氏は、平成17年度外務省 ODA 民間モニターとして7月23日から7月30日の間パプアニューギニアを訪問した。訪問団（15名）団長として現地を視察した感想や ODA に関する問題、又、日本人には馴染みが薄いパプアニューギニアの話等を、先月号に引き続き語っていただく。

1. この国の交通は飛行機が頼みの綱

東部ニューギニアといえば、太平洋戦争での激戦地である。そのなかでも留めておかなければならないのはココダの戦いでの凄惨な出来事である。作戦は北岸に位置するブナからニューギニア本島を横切り、南岸の連合軍基地ポートモレスビーを攻略するというものであった。この為には島の中央を走る二千メートル級の山を連ねたスタンレー山脈を越えなければならない。この無謀な作戦が強行されなければならないほど、日本軍は追い込まれていた。

結果は無残な敗退。1万2千の日本軍のうち生きて帰れたのは3千4百余。多くの徴傭現地住民も巻き込まれた。犠牲は敵弾ではなく、その殆どが餓死とマラリアであった。やせ細った腐乱死体はジャングルに散乱して死臭を放ち、豪州兵も近寄れなかったという。

ニューギニア島は、一部海岸沿いの地域を除き、国のほぼ全域が急斜な山々から成り立ち大

ジャングルに覆われる。陸上交通の整備は国を国たらしめるための要であり、各国の援助もここに向けられてきている。しかし、地形と自然は今も大きな障害となっではだかっている。そこでヒト、モノの行き来を最低レベルでも確保する為には、まずは航空交通を確立しなければならない。また、国はニューギニア本島のほか、ビスマルク諸島、ブーゲンビル島、ソロモン諸島、そのほか約600の小さな島々から成り立つ為、さらに航空交通の重要性は増す。このような状況の中、この国の要請と援助各国の協議により、日本は、ポートモレスビー空港整備を担当することになった。同空港は国内航空の拠点でかつ国際空港でありながら、ターミナルビル・安全管理システムなどの設備に問題を抱えていた。ここに日本政府の融資（円借款）によりターミナルビルの整備・拡張、保安施設改修等の大工事が行われ1998年3月に完成した。



▲有償資金協力で建て替えられたポートモレスビー国際空港

2. 降り立った空港が一番目の視察場所

7月24日未明、15名のODA民間モニターと随行スタッフからなる視察団はポートモレスビー国際空港に降り立った。降り立った場所がそのまま一番目の視察案件となる。機中泊の疲れとか、言っている場合ではない。まだ明けやらぬ早朝、しかも日曜日であるのにもかかわらず、空港エプロンには、空港長(ポートマスター)ほか現地関係者一同がにこやかに出迎えてくれた。

双方挨拶もそこそこに、滑走路、管制塔、ターミナルビル等に案内される。都度説明を受けながら、合間に質問や回答が飛び交う。一言でも聞き漏らさないように耳をそばだてながらメモをとる。同行撮影スタッフのカメラも回る。

そのターミナルビルや、セキュリティ設備等もしっかりしており、日本の地方国際空港と比較して遜色もなく、違和感もない。経営状況も健全で空港単体では相応の利益もあげている。ただし、乗客数、貨物量、発着数は伸び悩んでおり、その結果、空港職員のリストラも強いられているという。観光産業の発展とそれに伴う外国人観光客の増加という当初目論みが外れかけている。観光産業をどう立て直すかは、この国の自立にも影響する大きな課題でもあり、各国の重要な指導支援対象ともなっている。勿論、観光立国日本もしっかり関わっている。

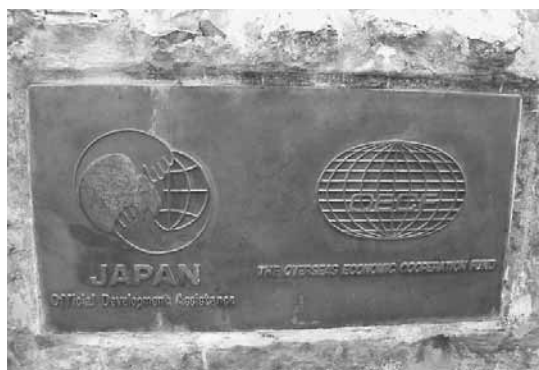
ターミナルビル入り口横の石碑に刻まれているのは堂々のODAシンボルマーク。この石碑をバックに誇らしげに写真に収まり、最初の案件視察を終えた。



▲ODAのシンボルマーク

3. 視察ODA案件は全部で9件

今回の視察は、この他に8案件、合計9案件が選ばれ準備されていた。



▲ポートモレスビー国際空港ターミナルビル玄関のODA石碑

今回訪問滞在したのは首都ポートモレスビーと離島のラバウル市。ラバウル行きは経由地への寄航もあり半日を要す。視察以外にも日本大使館、現地関係省庁機関への訪問と懇談、夜には親善行事や打合せも入ってくる。これらを7日間の滞在期間でこなしてゆくのは、相当の気力と体力を要する。その中であってラバウルの戦跡と「戦没者の碑」への慰霊は、ODAとは直接関係のない唯一の立ち寄り先であった。

4. ODAは「カネ」と「ヒト」の二通り

その国に対するODAでの協力方法として、カネ(資金協力)とヒト(技術協力)によるものがある。前者は、さらに融資(有償資金協力)と贈与(無償資金協力)に分けられる。後者は、指導者を派遣するもの、また逆にその国の人を日本に呼ぶものがある。

有償資金協力は日本開発銀行、通称ジェイ



▲南太平洋戦没者の碑(ラバウル)
今も慰霊に訪れる日本人が相次ぐ



▲国道沿いの草むらに放置された旧日本軍戦車
ラバウルではこうした光景がいたるところで見られる。
去来する兵士の無念さ、戦争の痛ましさ、空しさ……。

ビック(JBIC)が行ない、人が絡むものは国際協力機構、通称ジャイカ(JICA)が担当する。全体の調整と無償資金協力は外務省が担当している。

今回視察9案件のうち、有償資金協力によるものは上述のポートモレスビー国際空港整備事業だけであった。この国に対しては視察案件以外にもインフラ整備を中心にこれまで9件の対象案件がある。有償資金協力は緩やかな金利と返済期間ながら借金ではある。この国も日本に対し、返済はきちんと行って来ていることも付け加えておきたい。

5. ここが、この国一番の公立病院

ここから、また、視察案件に戻り、その様子を述べてゆきたい。まずは、ポートモレスビー総合病院である。

病院に入って驚いたのは待っている患者の多さである。椅子は無いに等しく、座り込んでいる者、立ちっぱなしの者。痛さをこらえて数日も待っているという患者もいる。特にごったがえしていたのはレントゲン室の前。3台ある機械の一台が故障しているためだ。待っている人の中には腕を骨折し治療前の人もある。50ものベッドが並べられた大部屋の病棟には、付き添いの家族も混じりごったがえしている。点滴をされている患者、看護師による付け替え、赤ん

坊の泣き声、ベッドの上でぐったりした患者はただひたすら医師を待つ。様々な体臭や異臭。

この病院は1957年に開設されたが、老朽化が著しかった。その為、ODA無償資金協力を要請し1990年に全面的に改修された。我々の目から見ればひどい病院ではあるが、周辺の一般人が診て貰えるのはここだけである。

この病院で活躍している一人の日本人の姿を見た。薬局で指導に当たっているJICA派遣の青年海外協力隊員である。指導の一つは薬剤の棚卸しと管理。これまでは期限切れのものを投与する事例も絶えなかったという。

この国の医療関係者(保健省)と懇談もした。肺炎、流行性腸炎、マラリア、結核といった感染症による疾病が死亡原因の半数を占める。また、エイズの蔓延により、このまま放置すれば15年以内に100万人の感染者が予想されるという。日本の援助により当病院が建てかえられていることへの謝意を表しながらも、窮状を訴える声は悲鳴に近いものがあった。

それでも、ここは、この国一番の公立病院なのである。それでは地方やさらに僻地では一体どうなのか。胸が痛む現実がまだそこにはあり、援助の手が待たれていることを強く感じた。

6. 先生や教科書不足を補うものは

「放送用機材開発センター」を訪問した。放送教育での学習教材を編集・製作するところである。6年前、ODA無償資金協力により施設・建



▲ポートモレスビー国立病院にて

物の全面改修と内部設備の一新がなされた。

パプアニューギニアでの初等教育を充実拡大していくうえで、教師が足りない、教科書も未整備という基本的な問題がある。これをカバーするのが放送教育である。放送を聞かせることにより、同じ水準の教育が行なえ、教科書不足を補う。これであれば先生が未熟でも対応できる。1966年から始まったというから歴史は古い。しかし、この頃に作られた教材では内容が古く、最近のカリキュラムに合わない。また、近年はビデオ教材も導入されつつあり、これに見合った新しい機材の導入が待ち望まれていたのだ。

ここでも、日本人の姿が印象的であった。教材製作の指導に当たっている、元はNHKに勤務していたというJICA派遣のシニアボランティアである。ハードの提供に加え、その使い方をも指導して行くという日本の総合的な関わりは頼もしい限りである。

教育にラジオ放送を使おうとはいうものの、電気もろくに来てない村落も多いのが現実である。この国の識字率はいまだ60パーセント以下、初等教育での中退率も60パーセントを超えするという。事実、昼間も所在なげにしている子供達をあちらこちらで多数みかけた。

教育問題の解決には乗り越えなければならぬ多くの障害があり、時間も要するであろう。各国の援助協力に大きな期待がかかっていることを実感した。



▲うれしそうに学校に通う裸足の子、靴を履いた子

7. この高校の卒業生から将来の首相が

ポートモレスビー国立高等学校の正門に立つ掲揚台ポールにはパプアニューギニアの国旗に並んで日章旗が翻る。正門入り口には「日本の援助により当高校は完成」と記載された金色の大銘板。また図書館には日本コーナーが設けられ、地図や関連の図書や雑誌が置かれている。この日、我々の訪問を歓迎するため、舞踏クラブの女子高生が民族衣装を身に着け、シンシン(原住民の舞踊)を披露してくれた。日本に対する感謝の気持ちがいたるところに表われている。

当高校は日本の無償資金援助で10年前に設立された。それまで国立高校は全国にわずか4校、しかも首都圏には1校もない状態であった。高校への就学率を上げるためにも新設が不可欠となり、その中でもポートモレスビー市内に設立することが最優先課題となっていた。そして予算の面で自国での遂行が困難であることから、無償資金協力の要請があり、日本がこれを引き受けた。

授業状況を視察したが、日本の高校とは異質の空気が漂う。全国一の高い競争率を通過したという自覚の下に緊張感と活気に溢れている。当高校卒業生の多くが大学を経て社会人となり、各界の指導者となることであろう。首相輩出も確からしく響く。この国の将来を担う人材を育成することにもなるこの事業に、日本が関わったことの意義は大きい。援助を通しての両国盟友



▲ポートモレスビー国立高等学校で団員も踊りの輪に

関係の構築は、ODAの重要な側面ともいえよう。

8. 「さ～らばラバーウルよ、・・・」

バンブーバンド(竹筒を叩いて音を出す楽器)の演奏に乗せ、日の丸の旗を打ち振っての日本語での大合唱。オイスカ・エコテック研修センターでの歓迎風景である。日本人のことを思い出したくないニューギニア人もいるであろう。その人々の孫の年代にあたる若者が、当地ラバウルに因んだ軍歌「ラバウル小唄」を今、無心に歌ってくれている。歓迎に応え微笑みながらも目頭が熱くなる。

この研修センターは日本のNGO団体である財団法人オイスカが1987年に創設した。オイスカは「植林と農業の普及推進こそが国の発展の基礎」というかたくなな信念のもと、途上各国で活動을続け、当地でも着々とその成果を上げてきている。当センターでは自給できる小規模農家、特に政府が進める稲作振興政策に沿う専門家育成の為、各地より研修生を受け入れている。

このNGOの活動に対し、日本政府も援助を行ってきた。それは、研修センターの宿泊施設、教室の拡充、視聴覚機材の導入等々、身近でかつ急務なものばかりである。この種の支援には、「草の根無償資金協力」が適用される。通常は無償資金協力であれば手続きが複雑で時間も要するが、これは在外公館(日本大使館)で決裁できる。ただし、協力は原則1千万円以下となる。

当センターも自活経営のため各種事業を行っているが、その台所も相当に厳しいことが垣間見られた。それにも関わらず、在パプアニューギニア歴13年の所長の思いは熱い。この国の将来をロマンを持って語るその姿に感銘を受けた。

研修センターの農園には、各種の農作物、果物、畜産、そして指導のメインとなっている陸稲がある。陸稲栽培園の稲穂の波の向こうに「さ～らばラバウルよ・・・」と歌ってくれた研修生達の手を振る姿があった。



▲オイスカ・エコテック研修センターでの歓迎（於：ラバウル）
このあと「さ～らばラバウルよ」の大合唱が待ち受ける

9. 同胞の献身的な活動

JICAから派遣される指導者には20代～30代の青年海外協力隊、40代～60代のシニアボランティアがある。今回は、シニアボランティアの活動状況視察という名目で2ヶ所を訪問した。教育メディアセンターと投資促進公社である。

教育メディアセンターは、視聴覚教材を活用する教育方法を、教師に対して指導するところである。全寮制の当センターへの入所は自費であるにもかかわらず、全国各地から多数の教師が集まる。しかし、研修生のなかには地方に帰ってもビデオ設備はないという者も多い。そこで、このシニアボランティアは日本での教師としての経験を活かし、より現実的な視聴覚教育方法も指導していた。紙芝居である。それも全て手作りである。これに似たアイデアを随所



▲紙芝居を使って実践教育中のJICAのシニアボランティア
(メディア教育センターにて)

に取り入れ、「工夫次第では物がなくても効果的な教育は出来るのだ」と説く。「研修生に自信をつけさせて返すのが仕事でもある」と語ってくれた。

もう一つの訪問先である投資促進公社は、全国の優良な投資案件の開拓や輸出製品の発掘を行っているところである。ここには、海外営業の最前線で活躍していた商事会社OBが派遣されていた。「この国の人達に尊厳の念を持ち、同じ目線で接してきた結果である」と、これまでの成果を淡々と語ってくれた。同席した同公社職員全員の信頼が集まっていることも、そのやり取りや雰囲気の中にしっかり読み取れた。

これまで積み上げてきた経験が、また別の舞台で役に立てる。それをしっかり支えているJICAの組織、素晴らしい発見であった。この他にもJICA派遣者の活躍を見、懇談する機会を数多くもつことが出来た。これは今回の大きな収穫でもあった。

10. 世界の支援があって日本が復興

紙面の都合もあり視察全案件について述べることはできない。視察を終えて言えるのは全ての案件でODAはしっかり機能していたということである。視察したODAは全て地域にしっかり根ざして目的に沿った運用や活用がなされていたし、この国の将来の自立に向け大きく貢献していた。また、日本の援助であることもしっかりPRされ、感謝の気持ちも素直に汲み取れた。随所で対応してくれた大使館員、JICA職員を始め現地ODA関係者いずれの思いも熱く真剣で、胸を打たれた。今回の視察9案件は選りすぐったものではあろうが、他のODA案件も、うまく運んでいることを推し測るに十分であった。

特に、心を揺さぶれたのは協力隊やシニアボランティア、NGOスタッフの気負も迷いもない淡々とした姿であった。金さえを出せば義務は果たせるとする日本への自虐的イメージが私

の中で崩れ果て、自身の生き様にも疑問を投げる。これら同胞の献身的な活動が、今も世界の隅々にまであることを思うと胸が熱くなる。

今、日本は先進国の一員として、発展途上国をこうして支援している。だが、忘れてはならないのは、戦後の疲弊した日本が今日ある過程に、世界から多くの支援があったことである。

それはユニセフであり、世界銀行等々である。東海道新幹線も東名高速道路も然り、九電荏田発電所も世界銀行の融資を受け建設されているのだ。



▲国会議事堂前で

会期中の国会に招かれ、議長より首相ほかの閣僚、議員に紹介された。ODA民間モニターの訪問は当地マスコミにも大きく取り上げられた。

11. ODAにどう向き合っていくか

先月号では決して忘れることが出来ない私の思い出、すなわち、88年4月、ただ一人の日本人乗客として中東でハイジャック事件に遭遇した経験を語った。それは、この話の中に、日本のあるべき国際支援のあり方が示唆されていると思ったからである。

私が日本人であることが分かった瞬間、ハイジャック犯は「オー!!ジャパニー」と親しみを込め、大きな声を上げた。これは、終戦のどん底から見事に立ち上がり、目覚ましい発展をとげた日本への尊敬の念と憧れ、また、それにもまして、日本が不戦の誓いを堅持しながら発展途上国への援助という平和的手段で平等な外交を展開していることとは無関係ではないはずだ。

テロ行為という卑劣な手段は断じて許されるものではない。しかしながら、その原因についても目をそらしてはならない。貧困や虐待だけが原因であるとは決して言わない。だが、9.11事件を機に、その当事国であるアメリカが発展途上国への援助額を大幅に増加させ、欧州各国もこれに追隨している。貧困がテロの温床になりうることは自明の理でもある。

我々日本人も自国のことだけを考えていればいい時代には住んでいないのである。ODAが日本外交の根幹の大きな一部をなすことは、この先変わるべくもない。

一方、支援の源泉は国民の税金にある。少子高齢化に伴う年金問題等、国民の間に危機感が漂う中、ODAに対する風当たりは強まる。

日本が世界に伍していくには相応の負担は不可欠であることを認識しながらも、ODAの実態に正しく向き合うことが求められる。このためにも今回の経験を広く語り継いでいきたい。

最後に、視察を終えて外務省へあてた総括報告書の冒頭部分を抜粋し、寄稿の筆を置きたい。

『ポートモレスビー空港を離陸するニューギニア航空機、窓から遠ざかる緩やかな海岸線。日の丸を背負った旅はこれで終わった。安堵の中にこの一週間の出来事が蘇り、熱いものが込み上げてくる。日本も日本人もどうして捨てたものではない、もっともっと自信と誇りを持っていい。いつも手を振って微笑みかけてくれたこの国の人たち。「一生懸命応援しているからがんばれよ」と声を掛けるうち眠りについてた』

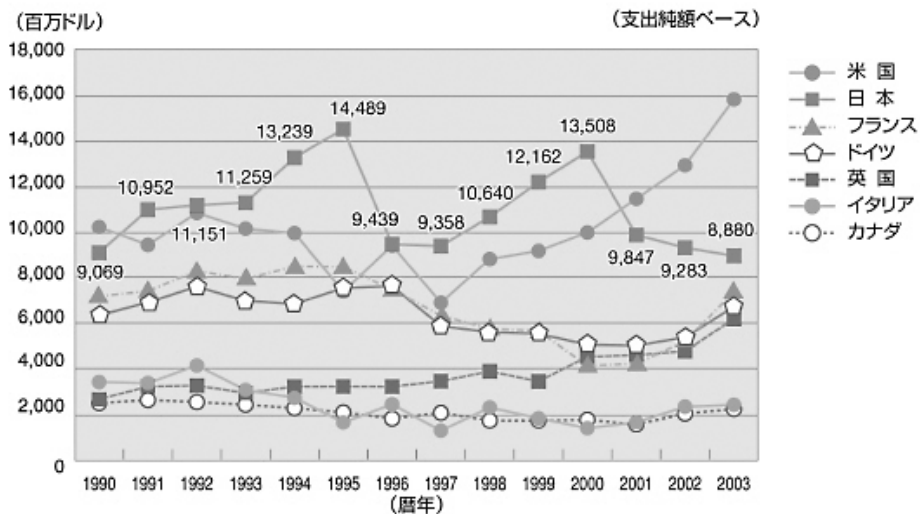
(注)本投稿に関し次のHPをご参照ください。

<http://www.apic.or.jp/plaza/>

(国際協力プラザ/ODA情報センター)

- ODA及びODA民間モニターについて
- モニターの視察報告書(緒統氏分他)
- 視察状況収録編集のテレビ番組アップ

DAC主要国のODA実績の推移(1990-2003年)



出典：2004年DACプレスリリース、2003年DAC議長報告

注：(1) 東欧向け及び卒業国向け援助は含まない。

(2) 1991年及び1992年の米国の実績値は、軍事債務救済を除く。

(3) 2003年については、日本以外は暫定値を使用。

▲主要援助国のODA実績の推移

2000年までは日本の援助額は世界一だったが、近年は減少の一途をたどる。それに比べて欧米各国は毎年増額し、特に2001年の9.11同時多発テロ事件以降は目立って増えている。